

特定非営利活動法人 瀬戸内海研究会議 編

きれいで豊かな海への挑戦 —瀬戸内からの提案—

目次

はじめに

第1章 瀬戸内海における環境管理に関する制度の概要と変遷

第1節 制度の概要と変遷

第2節 環境管理制度としての評価

第3節 瀬戸内法による管理制度のまとめと政策課題

コラム1-1: 瀬戸内海に影響を与える国際的な環境管理の動き

第1章からの提言—瀬戸内海における環境管理に関する制度の概要と変遷

第2章 瀬戸内海の水質・底質

第1節 瀬戸内海の水質と底質の変遷

第2節 CODの変化と要因

第3節 河川の栄養塩濃度の変遷と流入量

コラム2-1: 流域水文水質モデル (SWAT) を用いた大和川・淀川の長期栄養塩流出量復元

コラム2-2: 季節運転による栄養塩類負荷量の変化とその評価

第4節 地下水からの栄養塩供給

第5節 瀬戸内海の水質の変遷と水産への影響

コラム2-3: 干潟・藻場の機能

コラム2-4: 暖冬がもたらすマダイの越冬域の変化と漁獲量の増加

第2章からの提言—瀬戸内海の水質と底質

第3章 環境変動と海洋生態系の応答

第1節 瀬戸内海の水産資源変動とその応答

コラム3-1: イカナゴへの捕食者の影響

第2節 瀬戸内海の低次生態系変動とその要因

第3節 瀬戸内海での高次生態系モデルの応用事例

第4節 統合モデルの現状と課題

コラム3-2: 生物多様性の国際情勢

コラム3-3: 沿岸域における海洋酸性化の現状

第3章からの提言—環境変動と海洋生態系の応答

第4章 海洋プラスチックごみ

第1節 現状と課題

第2節 ごみの調査マニュアル

第3節 スマートフォンアプリを用いた水辺のごみの調査マニュアル

第4章からの提言—海洋プラスチックごみ

第5章 これからの海辺の環境教育

第1節 はじめに

第2節 海辺の環境教育

第3節 共同体を中心とした海辺の環境教育事例

コラム5-1: 海の世界学習—香川大学瀬戸内海圏研究センターでの事例

第5章からの提言—これからの海辺の環境教育

第6章 ブルーカーボンとその活用制度

第1節 ブルーカーボンとJブルークレジット制度

第2節 瀬戸内海のブルーカーボン

第3節 ブルーカーボンとしての湿地生態系

第4節 ブルーカーボン生態系の創出とJブルークレジットの活用

コラム6-1: 瀬戸内海のグリーンインフラ

第6章からの提言—ブルーカーボンとその活用制度

第7章 瀬戸内海に関する人文社会科学的側面

第1節 瀬戸内海の景観

コラム7-1: 景観を捉える新たな視点としてのテリトリーオ

第2節 瀬戸内海の観光

コラム7-2: 里山景観・里海景観

第3節 瀬戸内海の魚食文化—豊かな海への提言—

第4節 瀬戸内海的环境経済評価

コラム7-3: 人文社会科学からみた「豊かな海」

第7章からの提言—瀬戸内海に関する人文社会科学的側面

出版社: (株) 恒星社厚生閣

定価: 4,300円 (税抜)

発行日: 2026年1月31日

(B5判,268頁)

問合せ先: 特定非営利活動法人瀬戸内海研究会議 事務局

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

人と防災未来センター東館5階 (公社) 瀬戸内海環境保全協会内

TEL 078-241-7720 FAX 078-241-7730

Email: miyazaki@emecs.or.jp

本書の趣旨

今回、特定非営利活動法人瀬戸内海研究会議（「研究会議」）は、これまで行ってきた瀬戸内海の環境に関する研究成果に基づき、「きれいで豊かな瀬戸内海」の実現に寄与するための知見と提言をとりまとめ、書籍として刊行しました。

本書は瀬戸内海が主たる対象海域ですが、環境制度の変遷、水質・栄養塩類管理、生態系応答、海洋プラスチック、環境教育、ブルーカーボン、人文社会科学的評価を総合的に整理した内容となっており、他の閉鎖性海域や沿岸海域にも共通する事項を含み、瀬戸内海に限らずどの海域においても十分に役立つものと考えます。研究者、自治体職員、大学院生に必携の資料であり、全国の図書館や研究機関での利用に資する内容です。

1973年に瀬戸内海環境保全臨時措置法（1978年に瀬戸内海環境保全特別措置法に改正；以下、瀬戸内法）が制定されて50年余が経ちました。この間に、瀬戸内海を巡る状況は、地球温暖化を背景にした水温上昇の顕在化と栄養塩類濃度低下、それらが生態系と水産資源に及ぼす影響などを含めて大きく変化しています。それに対応して、瀬戸内法は2015年に「きれいな海」を目指した規制中心の従来の水環境行政から、「豊かな海」を目指した管理に大幅に方向を変えることが明記されました。

これに伴い、国の瀬戸内海環境保全基本計画（2015）では、「沿岸域の環境の保全、再生および創出」や「水産資源の持続的利用の確保」などが新たな目標として掲げられました。さらに、2021年には瀬戸内法が部分改正され、基本計画を含む体系としては、栄養塩類管理や海洋プラスチックごみへの対応がより具体化され、「瀬戸内海の水質改善」から「地域の実情に応じた里海づくり」へと大きく転換され、「きれいで豊かな海」を目指すことになりました。

本書は、そのような変化に対応する内容となっています。本書の構成は、大きく、テーマ別の第1－第7章の本文と各章の中でトピックやキーワードを扱ったコラムからなっています。各章中の本文では、具体的な研究成果や紹介される考え方や提言の根拠を重視しました。一方、コラムは読み物としても楽しめるものを目指したつもりです。各章の最後には、その章のテーマに対する提言がとりまとめられています。

本書をとおして、研究者、自治体職員、大学院生の皆様が「きれいで豊かな瀬戸内海」に対する全体的な理解が深まり、問題解決に対する具体的なイメージが湧くことを期待いたします。

なお、「きれいで豊かな海」の関連要因は極めて多様で因果関係も複雑なために具現化は容易ではなく、各論については検討中や試行錯誤中が少なくありません。また、科学、行政といった単独分野の対応で実現できるものではなく、科学と政治と地域社会などのこれまでになかったレベルでの協働を視野に入れる必要があります。これらの点については、研究会として引き続き解決を図っていく所存です。